

川崎支部便り 第76号 (2024年05月)

オープンで各自が主役：川崎支部

川崎支部支部長 山岸一雄 (執筆：山岸))

人生を豊かに (雑学のすすめ)

【アリス谷村新司の昂 (すばる) の本意とは?】

アリスの谷村新司 (1948年-2023年) さんへの新春インタビュー (2023年) です。ソロの代表曲である「昂-すばる」に込めた思いは、「みんな、いろいろな夢を持って生きていくんだけど、年齢とともにそれを諦めざるを得ないときもある。そんなときは、その夢を僕に預けて下さい。それを背負って行けるとこまで行ってみます。それが、「我は行 (ゆ) く」という歌詞の本意です」。

方向性を一つに決めることには耐えられないそうです。「アーティストは「ファンをどれだけ感動的に裏切り続けられるか」が大事との事。感動が無ければ単なる裏切りになってしまうので、そうならない様に万全を期して準備をします。安定よりも不安定さに挑戦してみようと思うとエネルギーが湧いてきます。不安定であることってアーティストにとっては**すごく重要**で、安定したアーティストはあんまり魅力がない」そうです。

「音楽で**いちばん大事な**のは、**何を伝えるか**です。アナログの最先端は**ハート**です。この人は何を言おうとしているんだろう、何で涙が出てくるんだろうっていう感情の部分は、デジタルじゃ絶対に表現出来ないと思うんですよ。だから、デジタルとアナログを上手に融合させながら、一番大切な「**心を伝える**」っていうことだけは忘れてはならないと改めて思います」

川崎点描：川崎支部活動拠点

【(川崎市政100年 国史跡橘樹官衙遺跡群とは?) ①】

(橘樹官衙遺跡群飛鳥時代の倉庫復元)

全国初となる飛鳥時代の倉庫を復元した「橘樹歴史公園」(川崎市高津区千年) が2024年5月18日(土)にオープンします。同園は**武蔵国・橘樹郡の役所跡に完成**。**1300年以上前の地域の歴史**が感じられるそうです。同園は2015年に指定された市内初の国史跡・橘樹官衙遺跡群に位置し、史跡は千年伊勢山台遺跡(橘樹郡家跡)と隣接する古代寺院跡の影向寺遺跡(野川本町)から構成されています。**7世紀から10世紀の地方行政組織の成立背景や推移**をたどれます。

1966年に行われた遺跡の発掘調査で、市は東西に並ぶ7棟の掘立柱建物跡を発見され、稲などを保管するための正倉とみられ、その後の調査で7世紀後半から8世紀に造営、平安時代の9世紀中ごろに姿を消したことが明らかになりました。



古代の技術を採用して復元された倉庫

(詳しく見ていきましょう)

140万都市「川崎」の原点となった古代の多摩川下流域の歴史像です。国史跡橋樹官衙遺跡群（くにせきたちばなかんがいせきぐん）は、武蔵国橋樹郡の役所跡である千年伊勢山台遺跡〔橋樹郡家跡〕と、その西側に隣接して造営された古代の寺院跡である影向寺遺跡から構成される古代官衙の遺跡です。本遺跡は、伊勢山台と呼ばれる東西にのびる多摩丘陵の標高40～43mの平坦な丘陵上に位置し、1998年（平成10年）度から2004年（16年）度に行われた橋樹郡衙推定地確認調査の過程で発見され、その後もガス管理設工事や開発事業に伴う調査や遺跡の詳細な内容把握のための確認調査等で調査研究が進められています。奈良・平安時代で、指定面積は橋樹郡家跡4972.77㎡、高津区千年字伊勢山台423番1ほか33筆、国指定史跡 平成27年3月10日指定です。

橋樹官衙遺跡群は、地方官衙の成立から廃絶に至るまでの経過をたどることのできる貴重な遺跡で、その成立の背景や構造の変化の過程が分かり、7世紀から10世紀の官衙（かんが）の実態とその推移を知るうえで重要であるとして、2015年（平成27年）3月10日に川崎市初の国史跡に指定されました。





遺跡群が地下に眠る「たちばな古代の丘緑地」=いずれも高津区千年で（市教委提供）

（千年伊勢山台遺跡とは？）

千年伊勢山台遺跡は高津区千年の丘陵上に営まれた縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。このうち、古代橋樹郡の役所にかかわる遺跡を「千年伊勢山台遺跡 [橋樹郡家跡]」といいます。これまでに発見された遺構は、掘立柱建物、塀、それに掘立柱建物の一部と考えられる柱穴群等です。これらの遺構は建物方位が大きく真北から西に30度ほど傾くグループ（1期・2期）と、ほぼ真北になるグループ（3期・4期）とがあり、それぞれのグループでも建物同士の重なりや規模などから新旧がさらにわかれ、現在では、最も古い1期（7世紀後葉）から最終段階の4期（9世紀後葉）までの、4時期の変遷が想定されています。

7世紀後葉には、3間×3間の平面形式で大規模な総柱式の掘立柱建物（以下、「総柱建物」という）が整然と配置され、橋樹評段階の地方拠点とした地方支配の成立過程では、この時期がひとつの画期となっていたことを明瞭です。郡家（評家）成立の当初から、同規格の倉が立ち並ぶ姿は全国的にも稀なことです。

（郡家とは？ 正倉院が曲がっている？）

郡家（ぐんけ）とは、古代の律令制度下でおかれた郡において、郡司（ぐんじ）以下の官人が政務をとった役所のことです（考古学の用語としては、郡家のことを郡衙と呼ぶこともある）。郡家には、郡庁（ぐんちょう）・正倉（しょうそう）・館（たち）・厨家（くりや）などが設けられました。

このうち、郡庁は郡の政務をとる庁舎、正倉は税として納められた穎稻（えいとう＝穂首刈りをした

稲穂)などを納める倉庫群で、溝や塀で区画された場合は正倉院(しょうそういん)と呼ばれます。館は宿泊施設、厨家は郡家で行われる給食や饗宴のための厨房で、その他に手工業生産のための工房や祭祀場などがおられました。

8世紀前葉には、ほぼ真北方位をとる正倉群が造営されはじめ、周囲を溝で囲んだ正倉院のなかに総柱建物の倉が数棟ずつ直列に並ぶ小群が複数形成され、まさに典型的な郡家正倉院の姿を示しています。こうした郡家正倉の成立は、701(大宝元)年の「大税貯置」の勅、708(和銅元)年の不動倉設置策、714(和銅7)年の租倉の等級制定などを契機とした稲穀貯積の本格化、真北方位をとる官衙施設の普及・整備、あるいは『続日本紀』の734(天平6)年正月18日の勅による雑色官稲と正税との一体化などに対応したものであったと考えられます。

橘樹郡家跡では、各小群の倉の増築順などもある程度復元可能で、早期には7世紀段階の正倉の設計あるいは建物そのものを受け継いだとみられる倉も造られていたことや、8世紀後半にかけて増築が進み拡充していった様子が明らかになっています。しかし、9世紀には、一部にみられる改築や新造も小型の建物ばかりで、大規模な倉は作られることなく、正倉院は急速に衰退し、9世紀半ばには消滅する。

8世紀後半以降も礎石建ちの倉を伴わないこと、他郡よりも早く郡家正倉院が衰退に向かう様相なども判明しており、正倉院の分散設置や郡家の移転の可能性なども考えられます。

この様なことから、7世紀後葉から10世紀にかけての古代地方官衙の成立から廃絶迄の推移を知る上で、全国的にも貴重な遺跡と評価されています。橘樹郡家跡も、このような施設からなっていると考えられますが、現在のところ確実に判明している施設は、租税を納める倉庫が並んでいた正倉院のみです。橘樹郡家跡では、最も広い部分で東西約210m、南北約160mの東西南北を区画する溝の一部が確認されています。また、正倉院の西側には、さらに郡家に関連すると考えられる大型建物群が広がっていることが分かってきました。



(橘樹郡家跡現地調査)



(千年伊勢山台遺跡)

橘樹郡家跡の確認調査で発見された正倉院内部の建物跡は、建物の主軸方向がほぼ東西南北に沿っているグループと、建物の主軸方位がやや西側に振れているグループが存在しています。

この違いは建物が建てられた時期の違いと考えられています。これらのグループの中でも建物どうしの重なりや規模などから、さらに新旧が分かれ、現在では7世紀後葉から9世紀後葉まで4時期の変遷を想定できます。また、この総柱式建物群の西側には、類似した規模の側柱建物が並列に計画的に配置されています。その性格については確定が難しいですが、稲を収納する正倉と並んで、武器あるいは他の税物などの収納庫が建てられていた可能性もあり、8世紀以降の郡家とは違った、評段階の役所がもつ多様な機能を反映している可能性もあります。(川崎・たちばなの古代史 村田文夫氏より)

(画像は Yahoo Japan から引用)

支部の活動

① 2024年05月25日(土):「第2回日吉台地下防空壕見学会」

13時15分に東横線日吉駅前銀色オブジェ前に集合。保存会への参加費1,000円の支払いは、川崎支部で負担します。

② 2024年6月15日(土):「第26回川崎支部定例講演会」(自由が丘クラブ2階14時30分~)

演題は「苦節30年の壮大な事業「玉川全円耕地整理事業」(奥沢地誌保存会代表 染野和夫氏)

(旧武蔵工業大学 経営工学部 OB)

自由が丘クラブは自由が丘駅から徒歩約8分です。

ご存じですか

【南京大虐殺とマギー神父?】

南京大虐殺についての証言で、一番感銘を受け、これがキー・ポイントだと思ったのは、マギーという牧師さんの証言である。マギー牧師は南京における赤十字の総責任者であって、南京市街をもっとも自由に動けた人であった。しかも彼はアメリカ人である。当時の日本軍は絶対にアメリカ人にはてを出さなかった。それが分かっているから自由に歩けたのだとも思う。マギー牧師はアメリカ東部の一流大学も出ている教養のある立派な経歴の人である。その人が東京裁判で宣誓口述、つまり神に誓って証言しているのだから、正体不明のシナ人たちの証言とは桁違いの信憑性があると思ったわけである。そのマギー牧師の証言を「東京裁判全記録」で読んでみると、まず牧師は大虐殺の噂を延々と述べている。それに対してアメリカ人の弁護人が「ところで、あなた自身の目で見えた虐殺は何人ですか」と聞くと、「一人です」と答える。次に弁護人が「どういう状況でしたか」と聞くと、「歩哨が止まれと言ったのに止まらなかった青年が追いかけて撃たれた」と答えている。

南京には安全地区という区域があって、南京事件が起こった時一般市民はそこに逃げ込んだ。その区域と他の区域との間には境があって、そこに通じる道には日本軍の歩哨が立っていた。その道に一人のシナ人の青年が逃げ込んできた。歩哨が制止しようとしたが聞かずに止まらなかったの、追いかけて撃たれたという話なのである。後にも先には、そのたった一人の例だけしかマギー牧師は目撃していない。

さらに略奪行為について問われると、「日本の兵隊がアイス・ボックスを担いで空屋から出てくるのを見た」と証言している。自由に市内を歩き回れた赤十字のトップのアメリカ人牧師が、聖書に手を置いて法廷で証言した目撃記録なのである。

この証言を読んだとき、こんな状況で何十万の市民を殺せるわけがないと確信した。何十万も殺すのは決して無差別に行えることではなく、システムティックな司令官であった松井岩根(いわね)陸軍大将は、敵味方の別なく将兵に対する慰霊に熱心だった人であり、残虐行為を命じるとはとても考えられない。主府が戦場になったのだから末端ではいろいろな事があり得たとは思いますが、命令一下に残虐行為が行われた等ということはありませんという強い心証を私は抱いた。

その後、軍事史の学問的な研究者である秦(はた)郁彦さんが『南京事件「虐殺の構造」』(中公新書)という本を書かれた。その中で秦氏は、曾根一夫という兵士の手記をもとに南京戦に触れている。秦氏

は、日本軍は大体 4 万人ぐらいを虐殺したと推定している。それまでは 30 万人虐殺説が定説とされていたから、10 分の 1 近くになったわけである。これは大きな功績だったが、問題が生じた。秦氏がその手記を最も重要な資料として引用した曾根一夫という人が、実は南京戦に参加していない兵士だと分かったのである。要するに、戦後になってから南京大虐殺についての東京裁判の話などが流れているのを聞いて、日本軍は残虐だったという物語を自分の空想なども交えてでっち上げたいらしい。

研究者ではないが非常に綿密な南京事件の研究をした板倉由明（よしあき）という人が面白い数字を挙げている。当時、南京の安全地区というのは白人たちが管理しており、日本兵の虐殺・略奪などの行為があればシナ人たちはそこに訴え出た。そして、そこを經由して日本軍に訴えが回ってきたのだが、その訴えの数を数えてみると 50 にも満たないというのである。仮に一人が殺されるのを 2 人が目撃したとすると、2 人が届け出たという可能性もある。日本人が殺したという報告は 50 に満たないという。これは傾聴に値するデータである。一部に悪い兵隊もいただろうと思う。そうであったとしても、30 万という大虐殺は明らかな虚構であり、4 万にしても多すぎるのではないか、実際は限りなくまぼろしに近かったのではないかと私は思っている。

ところが、2001 年になって北村稔（みのる）さんという立命館大学の教授が『「南京事件」の探求—その実像を求めて』（文春新書）という本を出した。台湾に当時の蒋介石政府の内部資料が残っていることを突き止めた。その資料を読むと、南京大虐殺の一つの根拠となった『WHAT WAR MEANS』という本を書いたティンパーリーというオーストラリア人（当時マンチェスター・ガーディアンの特派員として南京にいた）が蒋介石政府の情報活動に協力し、見返りに金銭を受け取っていたことがわかった。

こうした北村先生の発見は、その後、亜細亜大学の東中野修道（しゅうどう）教授による徹底的な調査によってすべて正確なものとして裏付けられた。東中野先生は、これまで南京大虐殺の証拠として使われていた写真を 1 枚残らず検証したのである。その結果、一つとして証拠として使えるものはなかったと立証された。その中には、当時「ライフ」に掲載された南京駅の鉄道の上で 1 人泣いている男の子を撮った写真も含まれている。これはすべての人の哀れみを誘い、日本軍の大虐殺の非道を世界に印象付ける様な写真だったが、これすらもその前後のフィルムの検証により偽物であると証明された。このフィルムには男の子の父親らしき人物が写っていたのである。一事が万事このような具合で、今まで南京大虐殺の証拠として使われていた写真はすべて虚構であり、証拠にはならないということが証明されたのである。

しかもその東京裁判によってつくられた歴史観に基づいて戦後日本のすべてが組み立てられてきたということも理解されていない。その東京裁判から戦後はすでに 60 年以上経過している。あれが裁判の名に値するものであったと認める国際法学者は今、世界にただの 1 人もいないと言われている。にもかかわらず、日本人の多くはそれを知らない。

（渡辺昇一氏から）

次号もお楽しみに。皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

問合せ・連絡先：川崎支部 幹事長 松本浩一

TEL：090-9363-6082 E-mail：kawa_matsu51@v00.itscom.net